QQML2017参加体験記

免許資格課程センター助教の佐藤翔と司書課程受講生の江藤由香里、小柳直士、安間優は、2017年５月23日から26日にかけアイルランド・リメリックで開催された9th International Conference on Qualitative and Quantitative Methods in Libraries（QQML2017）に参加し、2016年度の図書館演習で行ったグループワークの成果についてポスター発表を行った。

QQML2017ウェブサイト
http://www.isast.org/qqml2017.html

佐藤らの発表予稿
“Gaze behavior of public library users: Evidence from an eye-tracking experiment”, Sho Sato, Yukari Eto, Kotomi Iwaki, Tadashi Oyanagi, Yu Yasuma, Proceedings of 9th International Conference on Qualitative and Quantitative Methods in Libraries (QQML 2017) pp.1-8
https://www.slideshare.net/min2fly/gaze-behavior-of-public-library-users-evidence-from-an-eyetracking-experiment

以下に掲載するのは参加学生の QQML2017に関する体験記である。

QQML2017に参加して

文学部哲学科　江　藤　由香里

私にとっては初めての学会参加でした。QQML のテーマは「図書館における質的および量的手法」とかなり幅広いものだったため、発表も図書館経営に関する提言からデータベースの信頼性の調査まで、様々なものが行われていました。

特に興味を惹かれたのは “Increasing Visibility in the Social Sciences and Humanities” というタイトルの発表で、ウィーン大学で行われている研究支援の活動を紹介するものでした。社会科学や人文科学の論文は母国語でしか書かれない傾向が強く、海外の研究者から発見されにくいという問題があり、これに対して大学側で英語の書誌情報を付与するなどして見つけやすさを向上させているということでした。人文科学や社会科学の論文が海外の研究者に読まれにくいという問題は日本でも講演などで耳にする機会が多く、ヨーロッパでも同様の問題があるというのは興味深く感じました。

発表はすべて英語で行われていたため内容の半分も理解できていたか定かではありませんが、活発に質疑応答が行われていて大変刺激になりました。自分の専攻は図書館情報学ではありませんが、今後も何らかの形でこの分野に接していきたいと思います。

文学部国文学科　小　柳　直　士

佐藤先生からQQML2017に行ってみたい人はいませんかと聞かれたとき、この機会を逃すわけにはいかないと思った。図書館情報学の学会にはもちろん、自分の専門である国文学の学会にも行ったことはない。英語にそれほど自信があるわけではないし、何よりもまず海外に行った経験がない。そのような状況でも、自分が関わった研究が海外の学会で発表されるという、二度と訪れることはないであろうこの機会を目の前にして、ためらう理由はなかった。

アイルランドのリムリックに到着した翌日には、スーツに身を包み学会の会場であるサヴォイホテルに立っていた。学会に来たからには１回は質問しよう、このように自分自身で決め、何か質問できることはないかと一生懸命に発表を聞いた。しかし、発表者が話しやすいスピードで話される英語と、発表者が切り替えたいタイミングで切り替えられる英語で書かれたスライドに、内容よりも英語を理解することで精一杯だった。発表の内容を理解して、自分の言葉でメモを取り、質問内容を整理するという国文学科のゼミで日頃やっていることが、この学会ではほとんどできなかった。午後は何か質問しようと思いながら、昼食の時間となった。

昼食には、カレースープとサンドイッチを食べた。同じテーブルには、様々な国の研究者がいて、お互いに自分の発表のことなどを話していた。名刺交換も活発に行われ、研究者にとっては昼食の時間も大切な情報交換の時間なのだと感じた。二言三言会話することができ、サンドイッチもおいしく、楽しい昼食の時間だった。

午後のセッションが始まり、いよいよ佐藤先生の発表時間となった。先生は抑揚をつけ、身振り手振りを交えて発表していて、学会での発表はこうするのかと思った。発表の後、質問もいくつかあって、先生がそれに答えて質疑応答は終了した。発表内容を事前に理解していたので、質問についても理解することができた。質問によって、発表で詳しくふれていなかった内容にも話がひろがっていて、改めて質問の重要性を感じた。

いよいよこの日最後の発表となった。ここまで質問することはできておらず、質問するならこの発表でするしかないという状況になった。最後の発表は、ICT 時代における図書館情報学の専門家のためのプロフェッショナルスキルとソフトスキルについてであった。発表を聞いているうちに、AI（人工知能）と図書館員との関係についてどのように考えているかが気になったので、質問することにした。タイミングをみて挙手し、英語で“What do you think about relationship between artificial intelligence and librarian？”と質問した。司会者にフォローしてもらい、何とか発表者に質問内容を理解してもらうことができた。発表者は何かを手で切るようなジェスチャーをし、「テーマが大きすぎるので、細分化して考える必要がある」と答えてくれた。鋭い質問であったとはとても言えないが、つたない英語にも真剣に耳を傾け、答えてくれた発表者の姿を見て、質問してよかったと思った。こうして質問することができ、とても充実した気持ちで学会を終えた。

最後に、貴重な機会を作ってくださった佐藤先生、一緒にグループワークを行ったメンバーのみなさんに感謝申し上げます。

文学部国文学科　安　間　　優

今回先生からお声をおかけいただき、アイルランドの図書館情報学会（QQML）に参加させていただきました。私は学会という場に初めて参加したためとても緊張していましたが、昼食時には隣の席に座った研究者の方が笑顔でわかりやすい英語で話しかけてくださり緊張もほどけました。

いくつかの発表を聞いた後に先生の発表が始まりました。発表が始まると先生は身振り手振りを交えながら発表を行っており、英語での発表の仕方、抑揚のつけかたスライドショーの作り方などを学びました。発表が終わると様々な方から多くの質問が飛んでおり、この研究に対

する注目度というものを肌で実感しました。実験を行っていた時に先生はたびたび「この研究を行っている人がいない」ということをよくおっしゃっていました。研究を行っている人がいないからといって不必要な研究では決してないということを改めて深く思いました。

今回 QQML に参加したことで、私は様々な視点から図書館に対する研究が多く行われていたことを知りました。図書館情報学は幅広い分野を包括することができる興味深い分野だと思いました。しかし肝心の発表は私自身英語があまり得意ではないため、聞いていてもわからないところも多く、研究内容が興味深いものばかりだったためにたいへん歯がゆい思いをしました。自身の勉強不足の自覚へとつながりました。

私は卒業後一般企業に就職をするため、これから図書館と関わるのは利用者としての立場となります。図書館を運営するうえで配置など様々な研究が行われているというバックグラウンドをもとに利用者としての視点からより良い図書館作りに貢献していきたいです。今回の貴重な経験は、図書館に対する世界が広がると同時に勉学に対しての意欲も高まりました。本当にいい経験ができたと思います。